

1 アメリカ

上野大学教授 武内 清

- チエツクポイント●
- ①各教科のカリキュラムや教育方法に、異文化に対する理解、尊重、集団に全所属ではなく、個人の選択を尊重し個性を生かす教育が行われている。
- ②多文化、異文化に対する理解、尊重、集団に全所属ではなく、個人の選択を尊重し個性を生かす教育が行われている。
- ③集団に全所属ではなく、個人の選択を尊重し個性を生かす教育が行われている。
- ④それぞれの時代の教育改革は、時代の要請する価値態度を含んでいる。現代は社会的平等と学力の向上が主目標である。

学校における価値教育は、蓋図的な道徳教育だけでなく、潜在的カリキュラムも含めた学校生活全体を通して行われている。アメリカの価値教育の特徴を明らかにするために、アメリカの一部市の小学校のクラスの様子を素描することから始めよう。

1 娘（5学年）の学校体験

担任のクレントル先生は、一見でまばしきたこもでの中年女教師という第一印象だが、実は親切な情のあつい先生で、ぶっきらぼうながらさりげない配慮をよくしてくれた。たとえば、始業日に生徒が一人ずつ自己紹介をして娘の番になりとまどっていると、先生は「私も日本語が話せないの。英語でいくつか質問しますね。お名前は？」と、英語を話さないことと日本語を話さないことを対等に扱いはないという言い方で、緊張している娘の気持ちを楽しませてくれた。

クラスにはその担任の先生以外に、補助教員が2名いて、授業や採点の手伝い、そして同じクラスにいる自閉症児、ダウン症児の面倒をみていた。4名—5名ずつのグループで、

道徳的、価値的内容が含まれている。生徒をはかる教育が行われている。

道徳的、価値的内容が含まれている。生徒をはかる教育が行われている。

道徳的、価値的内容が含まれている。生徒をはかる教育が行われている。

道徳的、価値的内容が含まれている。生徒をはかる教育が行われている。

日本の班学習のようなやり方をしていた。授業方法は、伝統的な一斉授業の形が多く、おた教科によって二つか三つに分割する場合もみられた。教科書を使用していたのは算数のみで、プリントを使った授業が多かった。算数は、進度別に個人個人違ったプリントで問題を解き、自分で採点する場合が多かった。社会科学は、自分で考える内容が多い。たとえば、自分がインディアンだったら、こういう場合どうするかを考えながら、インディアンの生活について学ぶ授業が2カ月続き、娘はすっかりインディアン好きになった。道徳の時間がとくにあるわけではないが、各教科のなかに道徳的、価値的内容が含まれている。毎時間、生徒の教室の出入りが多いたが目立った。それは個人個人選択科目が違うことによる。コーラス、ストリンクス、コンピュータ、ESLクラスなど好きな科目を取り、また交着で、体の不自由な子の面倒をみる。交着で近くのスーパームーにお菓子の材料を買いにいったりも、クラスを抜けることになる。子どもたちの異文化に対する許容性は、日本に比べるとはるかに大きい。学校初日から、娘と遊びたいと先生に申し出てくれる子がいて、最初の日からその子と一緒に校庭を駆け回っ

ていた。友だちグループは日本ほど閉鎖的ではない。まもなく、仲のよい5人組ができ、いつも行動を共にしていた。

インターナショナルデー（民族衣装を着てくる日）には、アメリカ以外の国からきている子の国や文化の紹介が、親の参加を交えて（日本人の子や親は着物をきて、折紙や習字の美術をしていた）行われた。クレイジーベアデー（奇妙な髪型で登場する日）、パジャマパーティー（パジャマで登場する日）、バレンタインデー（プレゼントを持ってきてよい日）、父親の職場を尋ねる日など、特別な日が多い。学校外の生活も学校へ持ち込まれていた。

6月の下旬には、はや学期の最終日がくる。娘は黒髪学年（5年）なので、卒業式があった。卒業式は体育館で、5年生とその親が出席して、校長先生のスピーチと校歌と担任の先生からの一人ひとりの卒業証書授与があり、その後、同じ場所で行われてお茶の会であるパーティーがあった。パーティーでは親同士また娘と子がかなり顔見知り、みんなが別れを惜しんでいた。

それから長い2カ月半の夏休みがくる。アメリカの子には、夏休みの計画を導くと、友だちと遊ぶ、カヌーにのる、祖父母の家にいく、家族で旅行するといろいろだが、基本的に、家でのおんべりや夏を楽しむというふうであった。それに対して、日本人家庭の子どもたちは、目一杯スケジュールを詰め込むことが多い。つまり、サマースケジュール、集団キャンプといった、学校のなかに子どもたちを参加させ、飽えたいと考える。

アメリカ人は、夏休みは基本的に家族とゆったりと時間を過ごすときと考えていたようだった。学校のサマースケジュールは、学校と違いおんべりとしたスケジュールで進行する。長期の宿泊キャンプは自然のなかで、ボート、カヌー、水泳、クラフトなどのおんべりと過ごす。

2 学校生活の巨米比較

アメリカの小学校に娘を1年間通わせて気が

がった日米の学校や教育の類似点、相違点は、次のようなことである。

第1に、異文化に対する許容度の大きな社会である。白人中心の文化から、さまざまな人種の文化を対等なものとして認める方向に動いている。アメリカも、かつては白人中心の融合政策 (melting pot) がとられていたが、それが文化の多様性を生かすサラダボウル政策 (salad bowl) に変わりつつある。多文化教育 (Multicultural Education) が盛んになっている。生徒たちの出自の民族や文化を大事にし、その尊重のうえで同じ人間として、理解し共生できると確信している。

第2に、クラス（学級）や時間割に関する考え方が、日米で少し違う。日本では学級単位で時間割が考えられているのに対して、アメリカでは個人単位で時間割が考えられている。日本では、生徒は学級に全所属で、先生も自分のクラスの子を自分の家族の一員のような気持ちで全面的に面倒を見る。アメリカでは、生徒はクラスに半所属で、その時間内に自分にあつた科目があればそちらを選択してクラスを抜ける。アメリカの教室で生徒の出入りが多いのは、そのせいである。クラスが開放的な分、いじめがおこりにくい。

第3に、教師の生徒に対する統制の仕方が日米で違う。日本の教師は、子どもと休み時間に一緒に遊んだり、生活指導によって生徒の心をつかむことが期待される。アメリカの教師は生活指導はカウンセラーにまかせ、自分は教科指導でいかに生徒の心をつかみ、やる気をおこさせるかに生活指導をなしている。いろいろな係をつくり、教師の指導なしでも生徒が自主的に行動し学級の統制がよれるようになっているのが日本の学級であり、教師の権威でもって生徒を統制していくのがアメリカの学級である。

3 ホームスクーリングの拡大

現代のアメリカでは、ホームスクールで子どもを教育する家庭が増えている。1998年で

